

## 社会存在論の一形態

渡辺安夫

ここで『社会存在論』というのはマルクスのものである。しかし、マルクス自身はそれをまとめた形では残していない。したがって、ここでは、マルクスの立場に立つとき『社会存在論』はどのような形をとるか、という角度からこれを問題にする。すべての考察は考察の対象となる思想に対してつねに間接的である。が、小論はこの意味で二重の形で間接的になる。それが間接的であるということから直ちに次のような疑問がでてくる。

マルクスにおいて『社会存在論』は成立しているだろうか。または成立しうるであろうか。

マルクスが学問の対象として社会を選んだのは確かに事実である。しかし、彼はそれを哲学の対象としてよりも科学の対象として選んだ。したがって、若しこれを哲学の問題として扱おうにしても、それは存在の問題としてよりも認識の問題としてまず考察すべきではなかろうか。このような疑問がはじめにでてくる。そして、それはまた、認識の問題を抜きにした存在の問題が果して存在の問題として十分な形で成立しうるだろうか、という疑問にも連なっていく。マルクスにおける認識の問題が私の場合未だ不徹底な形でしか追究されていないいま、このような疑問がでてくるのはもっともなことである。マルクスにおいては、たとえ存在論的考察が可能であるにせよ、それは認識論的考察を前提にしたものでなければならぬと私自身も考えるからである。しかし、それにも拘らず、ここで敢てこのような形で考察をすすめたのは、たとえ不十分なものであるにせよ、社会存在の問題を追求することによって社会構造の見取図を手にしたいたいと考えたからである。見取図を手にするによって、認識の問題をより具体的に展開しうると考えたからである。標題を『社会存在論の一形態』とした理由の一つは実はそこにある。しかし、そのような理由によってたとえこのような形で考察が許されるにせよ、提出した疑問は疑問として依然残るであろう。なぜならば、マルクスにおいては『社会』よりも『自然』がより根源的な概念であると考えられるからである。彼の場合、考察の対象となる社会は経済現象をもとにしてこの側面から問題にされるのであるが、その目指すところは一社会がもつ『運動の自然法則』を明かにすることにある。(Vgl. K, Vorwort zur ersten Auflage) 社会が人間と人間との関係の総体であり、したがって個々の人間を構造契機とするにも拘らず、この社会が『ただに人々の意志、意識、および意図から独立しているばかりでなく、むしろ逆に人々の意志、意識および意図を規定するところの諸法則』によって支配されていることを明かにすることがその狙いであった。(K, Nachwort zur zweiten Auflage) そこには『経済的な社会構造の発展を一つの自然史的過程』と考える彼の基本的な態度が見出される。(K. Vorwort zur ersten Auflage) 社会を一の自然として把握しようとする考えがそこにある。ここでは『社会』の概念より『自然』の概念がより根源的であると考えられる。しかしそうであるなら、問題になるのは『社

『社会存在論』ではなくして、むしろ、『自然存在の論理』ではなかろうか、という疑問がここから出てくる。そして、事実、マルクスにおいては、彼の思想を展開するならば、自然概念をもとにした存在論が可能であると考えることができる。しかし、それにも拘らずここで特に『社会存在論』を問題にしたのは次の理由からである。彼の場合、社会は自然概念をもとにして把握されるにせよ、その社会がもつ自然性は社会としての自然がもつ自然性であり、自然科学の対象である自然がもつ自然性とは区別されるものでなければならぬということ。根源的には社会は自然概念をもとにして把握されるにせよ、その社会は『社会』という形をした自然として自然科学の対象である『自然』から区別されるものでなければならぬということ。このことが彼において認められるからである。しかも、単に区別されるだけではなくて、社会は社会それ自身の構造をもち、そのような構造をもつものとして自然科学の対象である自然から自立するものでなければならない。社会存在論が成立するためにはこの自立性の承認は極めて重要な条件であると考えられる。以上、それが二重の形で間接的であるにも拘らず、小論がこのような形の『社会存在論』を明かにしようとしたのは彼の場合上記の条件が具備されている、と考えたからである。

### (一)

社会存在論の問題を考える場合、どうしても人間存在の問題をとりあげざるを得ない。そこに予想される社会存在論がたとえどのような形のものであるにせよ、社会の構造契機となるものはつねに人間であると考えられるからである。この場合人間をどのような角度からとりあげるかはそこに予想される社会存在論の形につねに限定される。したがって、マルクスが次のように云うとき我々はそこに彼による人間規定を見出すだけでなく、同時に彼にこのような形で人間を規定せしめたところの社会存在論の形を考えざるを得ない。『人間は意識により、宗教により、その他好むものによって動物から区別される。しかし、人間自身は彼等が生活手段を生産しはじめるやいなや自分を動物から区別しはじめる。これは人間の身体組織によつて制約されている一行為である。人間は彼等の生活手段を生産することによって、間接に彼等の物質的生活自体を生産する。』(D. S. 17) すでに語られ、思惟され、空想され、表象された人間から出発するのではなくて、『純粹に經驗的な仕方確認しうる』形で人間を捉えるとき、(Vgl. D. S. 16) マルクスの前に現われた人間はこのようなものであった。それは生命体であることによって必然的に消費せざるを得ない人間であると同時に、消費されるものが生産物であることによって、消費を生産によって媒介する人間でもある。人間は消費することによって自己を再生産するのであるが、その消費によってなされるものは人間と自然との間に成立する質料変換である。それは、生命体が生命体として存在する以上生命体と自然との間につねに成立している筈のものである。人間が消費することによって自己を再生産することは人間が生命体一般に属する一の自然的存在であることを示している。しかし、人間においてはこの消費が生産に媒介されている、ということは、人間が単なる自然的存在ではなくして、人間としての自然であり、特殊な自然的存在であることを示す。生産は消費と同じく、他の

面からこれをみると、人間と自然との間の質料変換の成立を意味するのであるが、(Vgl. K. S. 185) この質料変換は特殊的自然としての人間に固有なものとなる。しかも人間の場合、生産は人間と自然との関係において成立するにも拘らず、この関係が同時にまた人間と人間との関係に媒介されて成立する。一方においては自然と関係し、他方においては他の人間と関係するこの存在様式は人間に固有なものとなる。そして、生産する場合つねに一定の人間関係に媒介されて生産するということは、生産と消費がつねにまた一定の人間関係に媒介されるということでもある。生産物が人間関係に媒介されることによってはじめて特定の個人に帰属し、消費されるということである。『生産者の生産物に対する関係は、それが完成すると同時に外的なものとなり、生産物の主体への復帰は、この主体の他の諸個人に対する関係に依存する。』(P. S. 249) かくして生産、消費と並んで分配(交換)が人間の存在条件となる。生産、消費は分配(交換)に媒介されることによって、人間関係に媒介されることによって夫々他に結びつく。生産が消費に結びつくことによって、消費もまた生産に結びつくことができる。生産—分配(交換)—消費—生産という媒介式がここに成立する。三者は相互に他に媒介され、一の円環を構成する。この媒介式の成立は人間という特殊な生命体の再生産の成立を意味している。三者は一の円環を構成することができて、はじめて人間の存在条件となりうる。円環を形づくる媒介式によって人間は人間として自己の同一性を確保できる。

生産、消費、分配(交換)の三者はそれぞれ異った形で質料変換を成立せしめる。すでに指摘したように前二者は人間と自然との間に成立する質料変換である。生産においては、それを対象的にみるならば、人間を媒介にして自然の側で質料変換が成立し、消費においては、自然を媒介にして人間の側にそれが成立する。これに対して、分配(交換)では人間と人間との間に質料変換が成立する。前二者において成立する質料変換を自然的質料変換と呼ぶるならば、これは社会的質料変換と呼ぶる。このように生産、消費、分配(交換)の三者はそれぞれ違った形の質料変換を成立せしめるのであるが、この三者によって構成される媒介式自体がまた一の円環運動によって全体として一の質料変換を成立せしめる過程でもある。しかも、この円環運動はつねに一定の方向をとる。生産を起点とすれば、それは生産→分配(交換)→消費→生産の方向に成立する運動である。三者はそれぞれ相互に他を媒介し、それぞれ相互に他に媒介されるのであるが、この運動の方向はつねに一定であって逆の方向をとることはない。しばしば指摘するように、生産においては人間に媒介されて自然の側に質料変換が成立するのであるが、この質料変換により変化した自然が分配(交換)されて消費される。消費においては自然に媒介されて人間の側に質料変換が成立するのであるが、その場合媒介になる自然とは生産において人間に媒介され変化した自然に他ならない。そしてまた、消費において自然に媒介され再生産された人間が生産において自然を媒介し、自然の側に変化をおこす。円環運動におけるこの不可逆性は人間にとって最も直接的な質料変換である消費における質料変換が体外→体内→体外、自然→人間への不可逆的な運動において成立していることに由来する。消費において成立する質料変換のもつ不可逆性が円環運動を不可逆的なものに規定する。

消費における質料変換が人間にとって最も直接的な質料変換である、というのは、生命体として

の人間が人間として同一性を確保しうるのは、直接的にはこの質料変換を通じてであるからである。生命体はすべてその生命体が属するところの種に規定された対象をもつ。生命体は自己に固有な対象との間に質料変換を成立せしめることによって生命体として存在しうる。この質料変換は同化と異化との、相互に対立するものの過程における統一であるから、一方においては自己に固有な対象の自立性を否定してこれを同化する過程であると同時に、他方においては、同化されたものが生命体にとって異化されてゆく過程でもある。同化と異化は互に対立しながら、しかも互いに他を前提している。同化すること自体がすでに異化を通じて成立する。したがって、人間という形をした生命体は、不断に自己に固有な対象の自立性を否定しなければならぬ、と同時に、この自立性の否定はすでにその対立者であるところの異化を前提するから、不断にまた否定すべき固有な対象をもたなければならない。生命体一般がそうであるように、人間の場合も、自己に固有な対象の自立性を否定しつくしてしまうなら、否定すべき対象をもち得ないなら、質料変換はその時点で断たれ、運動はその時点で停止する。人間はもはや人間として存在することができない。

人間が人間と自然との間の質料変換によって自己を再生産し、自己を再生産することによって自己の同一性を確保しなければならぬ、ということは、人間が一の自然として自然的必然にしたがうものであることを示している。が、この必然性は同時にまた生産が人間にとって必然的なものである、ということをも示す。なぜなら、人間が生命体として質料変換を成立せしめるために関係する自然は、そしてその自然は質料変換を通じて人間にその自立性を否定されるのであるが、その自然は人間の場合本来的にはつねに生産されたものであるからである。人間が自己を再生産し、自己の同一性を確保するためには、つねにそこに生産されたものがなければならない。自己を再生産しつづけるためには生命の発現の対象を生産しつづけるなければならない。

人間が自己を再生産するためにその対象を生産しなければならぬ、ということは、人間が一の自然であることを示すと同時に、人間が人間という形をした特殊な自然であることを示している。生産によって人間は他の動物から区別される、<sup>1)</sup> というのはじめに掲げたマルクスの言葉もまたこのことを示すものに他ならない。その場合、人間という自然に特殊性を与えるものは自己意識である。生産における人間と自然との関係は、基本的には、確かに、自然と自然との関係、感性的対象と感性的対象との関係として成立する。自然、若しくは感性的対象に対して現実的な関係を成立せしめうるものは、それ自身が自然若しくは感性的対象であるものに限られるからである。したがって人間が自然に働きかけうるのは人間が一の生命体であることによって、つまり、身体的存在であることによって可能である。この側面からするならば、消費においてそうであったように、生産においても人間と自然との関係は自然—自然の関係として示すことができる。生産は人間という特殊な自然においてのみ可能であるが、その生産における人間と自然との関係は、基本的には、人間が自然を一般者とする特殊的存在であることによって可能となる。生産が人間という特殊な自然の機能によって成立するというのは、この自然—自然の关系到意識が加わり、自然—自然の关系到感性的対象相互の关系到とは異なる特殊な関係となるからである。生産において人間は自然質料そのもの

には一の自然力として対応する。彼は自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取得するためにこの自然力を対象に加える。しかし、彼はこの場合単に自然質料の形態を変化させるだけではなく、そのなかに彼の目的を実現する。働きの結果がそのはじめにおいてすでに一の観念として現存する。(Vgl. K. S. 185. 186) 自然—自然の関係に特殊性を与えるものは人間の自己意識である。人間が感性的、対象的存在であると同時に自己意識的存在でもあることを、このことは示している。人間は単に生きた物ではなくして、『生きた、自己意識ある物』であるというマルクスの言葉にこのことは連なることになる。(K. S. 211)

人間は対象である自然に一定の力を加えることによってその形態を変化せしめる。対象は自然的存在であり一定の力学的な規定に条件づけられて存在するから、対象の形態変化は人間の加えた力と対象自身の力学的な規定との関係を通じておこる。後に考察するように両者の関係を力学的な関係としてしまうことには問題は残るが、この側面からみた人間と自然との関係が生産においては最も基本的なものであると考えられる。この場合、対象に加える力はつねに一定の量をもち一定の形態で支出される力である。人間と自然との間にみられるこの関係は、しかしながら、単に人間と自然との間にだけ見られるものではなくして、自然と自然との間に一般的に見出されるものである。したがって、人間と自然との関係はこの側面からみる限り単なる自然相互の間に成立する関係となんら異なるところはない。人間が自然に働きかける場合人間と自然との間に成立する自然—自然の関係が単なる自然相互の間に成立する関係と異なる点は、対象に加えられる力がつ一定の形態が人間によって意図的に決定されたものである、ということにある。対象に加えられる力が一定の量をもち一定の支出の形態をもつものであることは、例えば軒石を穿つ雨滴の場合と全く同じであるが、人間の場合は支出の形態は意図的に決定される。いま、人間と自然との関係を最も単純な形で考えるならば、一方には働きかけられる対象を、他方には、まだ観念形態にある結果、つまり、目的を見出すことができる。そして、さらに両者を媒介するものとして我々は身体を見出すことができる。対象の形態を変化せしめる場合、どのような形態で力を支出し、したがって、どれだけの量の力を支出すべきかは対象と目的との関係によって決まる。一方では目的が支出の形態を規定し、他方ではこの形態を対象自身が、それが如何なる性状のものであるかによって、規制する。身体はこのようにして決まった形態にしたがって運動し、力を支出する。人間と自然との関係において支出すべき力の形態はこのようにして決まるのであるが、しかし、現実においては、この形態は人間に対して既定のものとしては与えられない。目的そのものが所与的でないように、目的に対応する対象も所与的でない。そして、またこの目的を実現するためには如何なる形態で力を支出すべきかは人間が自身によって決定しなければならぬことである。人間は最も合目的であると考えられる形態で力を支出する。したがって、人間の自然に対する関係は、人間によって意識的に決められた関係となる。その場合、人間と自然との関係が自然—自然の関係を基本とするものであることには変りないのであるが、その自然—自然の関係をどのような形にするかを人間は自身で決定する。新たな目的が定立される度に自然—自然の関係は新たな形で人間によって定立される。そればかりで

はなく、同一の目的に対して人間はつねにより合目的な形の自然—自然の関係を見出さなければならぬ、若しくは、つくり出さなければならぬ。自然—自然の関係に意識が加わる、とはじめに云ったのはこのような意味であった。人間の自然への働きかけが可能であるのは、人間が感性的、対象的存在であるからであり、それが人間の自然への働きかけであるのは、自然—自然の形が人間によって意識的に決められたものであるからである。生産における人間と自然との関係はこの関係に加わる意識を捨象するときは自然と自然との間に成立する一の関係にすぎない。が、この関係に加わる意識の側面からこれをみるときは、自然—自然の関係が一の意味をもった関係となる。自然の領域ではなくして歴史の領域に成立する関係となる。人間が自然に働きかける場合、人間と自然との関係は前者を基本にすること、そして、後者は前者を基本にして成立すること、このことは、やゝ飛躍した云い方になるが、この関係が自然を基にして成立する歴史的関係であることを示している。人間は自然を一般者とする特殊的存在である、ということにこれは繋がっていく。

人間と自然との間に媒介者（労働手段）が介入しても以上述べた事柄は、本質的には、なんら変化しない。ただ、媒介者が目的とその現実形態とを媒介する、一定の構造をもつ自立的存在であることによって、人間の自然への働きかけの形は客観的に規定される。人間—媒介者—対象において成立する運動は人間を起点とする運動であり、それは人間の自発性において成立する運動であるにも拘らず、ここで人間が力を支出する形態は媒介者の構造に規定される。働きかける主体が誰であろうとそのことに拘りなく、媒介者は自身の構造に適応した形態で力を支出することを要求する。人間—媒介者—対象の関係式は、したがって、媒介者を中心とするものになる。勿論媒介者の人間に対する規定力は、そしてまた、当然、媒介者の対象に対する規定力もそうであるが、この規定力は必ずしも一定していない。それは媒介者自身の構造に依存する。媒介者が合目的な構造をとればとるほど、そして、自立性をもてばもつほど規定力はより強くなる。そのような場合、媒介者はいよいよ明確に目的を志向し、三者は共通の目的によっていよいよ強く結びつく。三者が構成する関係式はいよいよ明確に目的を表示する。したがって自然—自然、そして、ここではそれは自然—自然—自然の形になるのであるが、自然相互の関係に意識が参加するという前述のことは媒介者の産出が意識的になされる、という形でこの関係に加わってくる。自然に働きかける当の場合にも、自然—自然の場合と同じように、人間は合目的に、意識的に働きかけなければならぬのであるが、後者よりも前者がここではより重要な位置をしめる。やがて考察するように、媒介者をもつかもたないかは人間が自然に働きかける場合極めて重要な意味をもつのであるが、これまでの考察の範囲ではこの事はまだ問題にならない。こゝでは両者の相違は右に指摘した一点にだけあり、その他の点では、基本的には全く一致している。

既に指摘したように、人間は自己を再生産し、自己の同一性を確保するためには消費しなければならない。しかし、人間は不断に自己を再生産することによってのみ自己の同一性を確保するのであるから、消費されたものはまた不断に生産によつて補われなければならない。生産と消費は結合することによってはじめて人間の存在条件となりうる。生産は消費に結びつくことによってのみ生産としての意義をもちうるし、消費は再び生産へ結びつくことによってのみ消費としての意義を

もちうる。ところが、現実においては両者は直接的には結びつかない。生産物は生産されると同時に生産者に対して外的なものとなる。自己が生産したものが自己に帰属しないのは何故か。それは生産者がすでに一定の人間関係に媒介されて生産し、消費しているからである。つまり、人間はすでに社会的存在であり、一定の人間関係において自己を再生産し、自己の同一性を確保しているからである。生産において人間は確かに自己を対象化する。そして、この対象化された自己は、それが対象的であることによって、自己自身に対立する自己である。それは生産者自身に対して在る一の自立的存在である。しかし、生産物をもつこのような自立性は人間によって否定されるべき自立性である。その自立性が否定されることによってはじめて生産物は生産物としての意義をもちうるような、そのような意味での自立性である。生産者はそのようなものとして生産物を生産する。先刻指摘した、生産は消費に結びつくことによるのみ生産としての意義をもちうる、という言葉も、実はこのことを別の形で示したものに他ならない。したがって生産物が生産者に対して外的なものとなり対立する、という言葉はこれとは違うことを表わしていなければならない。それは、生産物という形をした自然が人間に対して直接的に示す自立性ではなくして、一定の人間関係におかれることによって自立的存在として自己を示しうるようなそのような自立性でなければならない。生産物が社会的生産物であることによって、はじめてこの生産物はこの人間に対して在るだけでなく、同時にまた、他の人間に対しても在ることになる。生産物が生産者に対して外的なものとなるのは、生産が単に人間と自然との間に成立するのではなくて、この人間と自然との関係が人間と人間との関係に媒介されて成立しているからである。そして、生産がそのようなものとして成立していることは、同じく人間と自然との関係として成立する消費が人間と人間との関係に媒介されているということでもある。生産者に対して外的なものとなった生産物が生産者へ復帰できるかどうか、ということ、また、それがどのような形で復帰するかということ、このことは生産者がこの人間関係のなかでどのような位置をしめるかということ、そして、この人間関係が総体としてどのような構造のものであるかということ、このことに依存する。生産と消費はこのような人間と人間との関係の仕方の相違によって種々の結合の仕方を示す。分配(交換)が生産と消費を媒介するとはじめに指摘したのは大体以上のような事情に基く。

人間と自然との関係を媒介する人間と人間との関係は種々の形をもちうるが、いま主としてフォルメンを手懸として、これを分配、交換の二概念をもとにして原理的に区別すれば、我々は分配が支配的に行われる社会と交換が支配的に行われる社会とにこれを区別しうる。分配が支配的に行われる社会では人間と人間との関係は直接的結合によって成立し、交換が支配的に行われる社会では人間と人間との関係は間接的に結合することによって成立する。前者においては諸個人は自然的な諸紐帯によって直接的に結合され、この結合されたものが一の社会として諸個人に対しては基体になる。諸個人は社会に直接的に結びつくことによるのみ諸個人として存在しうる。これに対して、後者では諸個人は、直接的な形では、相互に独立している一の個体にすぎない。諸個人は唯交換によるのみ間接的に結合し、そのことによって人間と人間との関係の総体である社会を形成する。前者においては、諸個人が分配にあずかりうるのは諸個人がその社会の成員であることによってで

ある。これに対して、後者においては諸個人が分配にあずかりうるのは交換を通じてであるが、そのことは諸個人が交換を通じてのみ他の人間との関係を成立せしめうるということ、したがって、交換を通じてのみ社会の成員であることを実証しうる、ということの意味している。前者においては諸個人は社会の成員であることを前提にして分配にあずかったのに対して、後者では交換の成立が社会の成員であるための条件になる。また更に、前者においては生産の目的は社会の再生産であり、社会の再生産という限りにおいてその構成単位である諸個人の再生産が目的になる。これに対して後者では諸個人の再生産は自分自身によって個人としてなされる。社会の再生産は諸個人の再生産の結果として現われる。ここでも、諸個人の自分自身による再生産は社会の再生産が可能であることによってはじめて可能であるのに、諸個人は社会の再生産を直接的には目的としない。前者においては、したがって、生産の目的は使用価値である。使用価値が生産されることによって社会の再生産が、そして、諸個人の再生産が可能になる。これに対して、後者では諸個人の自分自身による再生産は価値の生産を通じて、価値の自己増殖の過程を経ることによって可能になる。前者において生産が直接社会の再生産を目的とする、ということは、ここでは生産手段は諸個人が直接的に総体を形成する社会そのものに直接帰属するということに繋がる。そしてまた、後者において諸個人が自分自身で自己を再生産するということは、それが諸個人に分割され私有の形をとっている、ということに繋がっていく。前者においては社会の成員であるということによって、その社会の再生産が可能である限り、諸個人の再生産は保証されていたのに、後者ではこの保証は直接的には与えられない。諸個人はなんらかの形で、資本家としてか労働者としてか、価値の自己増殖の過程に参加することによつてのみこの保証を獲得できる。(Vgl. F.)

分配が支配的に 行われる 社会と、(この社会ではたとえ交換が成立してもそれは分配に吸収される) 交換が支配的に 行われる 社会とでは、(こゝでは分配は交換を通じてなされる) 上述のように その形が異なる。しかし、分配及び交換は、生産と消費を媒介するものとしては、次のような共通点をもっている。分配にせよ交換にせよそれを通じて諸個人に帰属する生産物はその社会の総生産物の部分であるということ。そして、これらの総生産物は相異なる使用価値の総体であり、この使用価値を生産した具体的・有用的労働の総体であるということ。また、これと対応して、それは生理学的意味での一定の人間の労働力の支出されたものであり、したがって、それは抽象的・人間の労働の総体を形成するということ。

しかし、社会的総生産物が総生産物として自己を形成する方法は、二つの社会においてはそれぞれ異なる。それは、云うまでもなく、一方が直接的に人間関係の総体を形成するのに対して、一方ではそれが交換を通じて間接的に形成されるという上述のことに連なっていく。そして、そのことは更に、一方においては生産手段が直接社会の所有であるのに、他方ではそれが私有の形をとっている、ということに繋がっていく。前者においてある個人が分配にあずかりうるためにはその個人が社会の成員であることが必要であったが、それは彼が社会の一員であることによって共同所有であるところの生産手段に関係し、共同の生産にあずかっていたからである。ここでは諸個人の直接的結



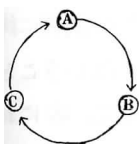
合である人間関係の総体が総体として生産手段に結びつき、総体として自然に働きかける。働きかけの結果である生産物は直接的に総生産物として自らを形成する。したがって、使用価値、具体的・有用的労働及び抽象的・人間的労働の総体も直接的に総体として形成される。これに対して、交換が支配的な社会では、生産は、直接的には、私的生産である。私的生産が社会的生産である実を示し、その生産物が社会的総生産物の部分であることを示しうるのは、同じように私的に生産された他の生産物との交換を成立せしめうることによってである。そして、使用価値及び具体的・有用的労働が総体として自らを形成しうるのもこの交換を通じてであり、抽象的・人間的労働が総体として自己を形成するのも交換を通じてである。『あるいは私的諸労働は、交換が労働諸生産物をして（また労働諸生産物を媒介として生産者たちをして）入りこませる諸連関により、事実上はじめて、社会的総労働の諸環たる実を示す。』（K. S. 78）生産物に対象化されている私的労働が社会的総労働の部分であることを示すことによって、生産物に新たに附加された価値もはじめて現実的に価値になる。諸個人への分配は附加された価値が価値になることによって、はじめて、可能になる。以上のことに更に次のことをつけ加えておく。交換が支配的に行われる社会では、生産における人間関係は本質的には資本家と労働者との関係として現われるのであるが、この人間関係も交換、つまり労働力—貨幣を通じて成立する、ということ。生産において新たに価値が附加されうるのもこのような人間関係が成立することによってのみ可能であるということ。この社会で交換を通じて分配されるものも、それが分配物として生産されうるためにはこのような人間関係の成立が前提になる、ということ。しかし、ここで人間関係を成立せしめる交換の一方の項である労働力は生産手段と結合することによってのみ労働力としての意味をもち、このようなものとしてのみ交換せられる。したがって、人間関係が交換を通じて成立するという事は、人間の自然に対する関係が交換を通じて成立するという事である。ここでは、人間は交換を成立せしめることによってのみ自然に働きかけることができる。労働者は他人の所有する自然に働きかけ、資本家は労働者と生産手段を結合せしめることによって、労働力を自己の資本の一部とするという形でそれを行う。分配が支配的に行われる社会では諸個人は直接的に総体として形成されている社会の一員として、社会の一員として同じ一員である他の諸個人に関係することによって自然との関係を成立せしめ得た。生産における人間と自然との関係が人間と人間との関係に媒介される、という点において両者は共通しているのであるが、その人間関係の形は、したがってまた、人間の自然に対する関係の仕方も著しく相違する。

消費及び生産においてそうであったように、交換及び分配においても質料交換が成立する。（Vgl. K. S. 109. 111.）交換は一般に、商品—商品、W—W の形をとるが、この場合、双方の商品は相互に質料的差別をもつことによって、W—W の形をとりうる。それぞれの所有者にとってそれぞれが所有する商品はそれぞれ非使用価値であり、それぞれの所有者にとって他の所有者が所有する商品は使用価値である。商品のもつこの質料的差別が双方の所有者を相互に依存させあう。と同時に、この質料的差別は W—W の運動の質料的動機となる。この運動がもたらす結果は、一方の所有者にとって非使用価値であるものの、その商品を使用価値とする他の所有者への帰属、ということである。非使用

価値であるものと使用価値であるものとの交換が双方の所有者の側に成立する。生産及び消費が人間と自然との間に質料交換を成立せしめたのに対して、交換は人間と人間との間において質料交換を成立せしめる。この質料交換を、商品のもつ質料がそれぞれ他と位置を変え、交換を成立せしめたものとするならば、ここでは人間と人間とに媒介されて自然相互の側に変換が成立するとみることができる。しかし、同時に、商品が質料的差別をもつということは、商品が異った形態で支出された労働力の対象化されたものである、ということであるから、 $W-W$  の運動によってなされる質料交換は労働の質料交換でもあることを示す。相互に有用な相異なる労働の変換であることを示す。この側面からすれば、したがって、変換は自然と自然とに媒介されて人間相互の側に成立することになる。商品そのもののもつ質料の変換、 $W-W$  の運動はこのような二つの側面において質料交換を成立せしめる。しかし、同時にまた、 $W-W$  の運動は『社会』そのものの質料交換をも成立せしめる。もっとも、この場合は、交換は個々の交換としてではなく総体として把握されなければならぬのであるが。私的生産物は交換を通じて社会的生産物である実を示しうるが、この生産物の複合体は社会的総生産物として一の総体を形成する。したがって、個々の交換が個々に行う商品の質料交換は、社会的総生産物の質料交換の一環を形成する。交換の総体によって社会的総生産物が一の総体として形成されると同時に、この社会的総生産物の質料交換が成立する。社会的総生産物がどのような商品を要素とするかということ、つまり、質料的に異なる諸商品がおのおのの位の割合で総生産物という一の総体を構成するかということ、このことは交換がその都度とる形態によって異なる。社会的総生産物の内容はその都度変わる。社会的総生産物は自らの質料を変換することを通じて総体としての自己の同一性を確保しうる。社会的総生産物がこのような形で質料交換を成立せしめるということは交換によって労働力及び生産手段が各生産部門に一定の割合で配分し直されるということでもある。生産及び消費における質料交換が自然的質料交換として自然法則に支配されるのに対して、交換における質料交換は社会的質料交換として社会法則に——価値法則に——支配される。分配が支配的に行われる社会では、社会的総生産物が直接的に総体として形成されることに対応して、社会的質料交換も直接的に成立する。

## (二)

いま、生産を①、分配(交換)を②、消費を③とすれば、上述の媒介式は次の図によって示すことができる。



$① \rightarrow ② \rightarrow ③ \rightarrow ①$  が形づくる円環は人間が人間として存在するための条件を示す。と同時に、この円環は人間がどのような形で現実に存在しているか、ということをも示す。 $① \rightarrow ② \rightarrow ③ \rightarrow ①$  の形式は人間である限りどの人間にとっても存在の条件となるものであり、したがって、如何なる歴史的段階においても、そのことに拘りなく、人間の存在条件として現われるものである。しかし、こ

の媒介式の内容はおのおのの段階において相異なる。人間は存在しつづけるためには自己を再生産

しなければならぬのであるが、彼が自己をどのような形で再生産するかは、彼がどのような形で自然に働きかけ、生産しているか、ということに係わり、また、彼がどのように生産しているかは、生産したものがどのような形で分配されているか、ということに係わる。人間が現実においてどのような形で存在するかは、その人間がどのような内容の媒介式を自己の存在の条件としているか、ということに依存する。所謂、個体のひとりの性格も歴史的形態を捨象した裸の人間において示されるのではなくて、ある歴史的発展段階においてこの媒介式がとる特殊な形態からのみ説明することであると思われる。人間のひとりの性格は自らの死を自らで死することにおいて極まるといわれる。この意味でのひとりの性格は人間がどのような歴史的発展段階に存在しようとも、そのことに拘りなく、どの人間においてもみられるものである。しかし、あらゆる段階において成立するこの事実が一の思想の形をとって現われうるのはある特殊な段階においてのみである。マルクスの言葉で云えば、『人間は、歴史的過程を通じて、はじめて、個別化する。』(F. S. 34)人間が個別化するという事は、人間が他の人間との関係を全く絶ってしまうことではない。もしそうであるなら、人間はかえって自らをひとりとして把握することはできない。個別化しながら、しかも、人間は他の人間との関係をもち得なかつたら人間として存在し得ないが故に、彼は自らをひとりとして知るのである。個別化した人間が自己自身の個性を自覚し、これをつきつめるとき、彼のひとりの性格が彼にとつて顕になる。

④及び⑤が⑥に媒介されているということ、そして、④及び⑤が⑥に媒介されることによつてのみ④及び⑤としての意義を充足しようということは、結局、人間が自然的存在であり、自然との関係を自己の存在の条件としているということを示すと同時に、人間が社会的存在であり他の人間との関係を自己の存在の条件としている、ということを示す。そして、そのことは、人間という形をした生命体においては、生命体としての現実性は単に生命体とその対象とを併せた全体においてだけ示されるのではなくて、④⑤⑥が構成する媒介式の全体においてこそ示される、ということでもある。生命体が自己を再生産することにおいて自己の同一性を確保できるのは、⑤が他の二者を確保することによってである。換言すれば、生命体が他の自然との間に成立せしめる質料変換は、人間の場合、人間と人間との間に成立する質料変換を前提しており、その質料変換は更に、生産において成立する、人間と自然との間の質料変換を前提している、ということである。⑥は生命体一般に通ずる質料変換であるにも拘らず、それが媒介式の一環としてのみその意義を充足しようということは、⑥が人間に固有な形の質料変換であることを示す。そして、そのことはまた、④及び⑤が人間に固有な質料変換である、ということにも連なっていく。

④が⑥を前提するという事は、人間の自己を再生産するしかたが人間と人間との間に媒介され、これに規定される、ということであった。しかし、⑥がどのような形をとるかということは④に規定される。しかし、その場合、⑥を規定するのは、実は、④そのものではなくて、④における人間関係である。そこで人間と人間とはどのような形で生産手段である自然に関係するか、この関係の形が⑥に特定の形を与える。したがって、⑥は④における人間関係と本質的には同一であり

前者は後者の裏側の形になる。媒介式に特定の内容を与えるものは④の特定の形であり、④の特定の形は④における人間関係の特定の形からでてくる。③が分配を中心としたものであるか交換を中心としたものであるのかは、④における人間関係が直接的に総体として形成されており総体として生産手段を所有するか、或いは、④における人間関係が個々の人間相互の関係としてあり、個々の人間が個々の人間として生産手段を所有するのか、ということに規定される。就中、後者においては、生産手段が個々の人間に所有されるだけでなく、所有するものと所有しないものとに分かれていることが重要な条件となる。所有するものも所有しないものも自己を再生産しなければならぬ点においては同じである。が、前者は労働力を購入することによって、つまり、 $G-A$ を成立せしめることによって、これを生産手段に結合せしめ新たに価値を附加せしめ、附加した価値の部分をもって、 $w-g-w$ を成立せしめる。後者は労働力を売ることによって得た貨幣で生活手段を購入し、 $W(A)-G-W'$ を成立せしめ、かくして、自己を再生産する。人間が現実にとどのような人間として存在しているかということは、生産手段である自然をもとにして人間相互がどのような形で関係しているか、ということと同じ面をもつ。この場合、人間の自然に対する関係は、人間と自然との関係の側面において示される人間と人間との関係に他ならない。

以上のように考えるなら、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A$ の媒介式は④を起点とする円環運動であると云える。厳密に云うなら、それは④における人間関係を含めた④を起点としていると云える。媒介式に関する我々の考察は、はじめは、人間にとって最も直接的な質料変換である③からはじめられた。媒介式が人間という形をした生命体の再生産を示すものである以上、③は三者の中では人間にとって最も直接的であり、重要な意味をもつ。③はその限りにおいて媒介式がとる運動の方向をも規定した。しかし媒介式の運動を現実において開始するのは、人間関係を含めた意味での、④である。④は現実における出発点であり、且つ、④は③、③に特定の内容を与える。③が如何なる形のものになるか、したがってまた、③がどのような形で④に繋がるかは④に規定される。

人間が現実においてどのような形で存在するか、ということは、媒介式の内容によって規定されるのであるが、その中で人間関係をも含めた意味での④及び③が重要な意味をもっていた。つまり、彼がどのような形で他の人間と関係し、どのような形の社会に属するか、ということが人間の在り方を規定する。しかし、人間がどのような形で、どのような社会に関係するかは、その人間にとっては、偶然的な側面がある。つまり、それはその人間にとって所与的な面がある。しかしまた、彼が一定の形で一定の社会に属することが偶然的な側面をもつにせよ、彼はその社会から抜け出すことはできない。彼はその社会を自己の活動の基盤としなければならない。人間と社会とのこの関係は人間が自分自身と肉体との間に見出す関係に似ている。ある肉体はある特定の人間の肉体であり、彼はこの肉体とこの肉体に附随する諸機能を再生産し、発展させることを通じて彼自身として存在する。しかし、この肉体は彼自身によって全面的に形成されたものではなくて、所与的な側面をもつ。それは、彼の活動にとってあらかじめ存在するところの、活動の前提であってその単なる結果ではない。ヘーゲルも指摘するように、肉体は形成せられざる存在と形成

せられたる存在との統一である。人間は自分自身が活動する際その活動の主体となる。その活動が彼の自発性において成立するが故に、彼は自分自身の相貌と姿態とをもち、自分自身をこの相貌と姿態とにおいて表現する。しかし、そのように彼が自分自身を表現するその表現も、結局は、生得的な肉体においてなされる。(Ph, S. 225) このような肉体の私に対する在り方は社会の私に対する在り方に通ずる。肉体をその人間から引き離すことができないように、その人間が属する社会からその人間を引き離すことはできない。そしてその肉体が生得的な側面をもつように、その人間が属する社会は、彼がどのような形でその社会に属するかということをも含めて、彼にとって所与的な側面をもつ。そして、この所与的なものは彼の在り方を規定する。彼は与えられた言語を語り、与えられた言語によって思考する。彼は与えられた生産諸条件の中で生産し、与えられた形で他の人間と関係し、この関係項の一として活動する。勿論、彼は与えられたものに対して単に受動的ではなく、これに働きかけ、改変する。しかし、その働きかけ、改変そのものが与えられたものを通しての働きかけであり、改変である。

このように、人間が活動の基盤とするところの社会は、人間にとっては所与的な側面をもつ。しかし、たとえ所与的な側面をもつにせよ、人間はこの社会のなかで自発的に活動せざるをえない。私自身に与えられた社会を私自身に与えられたものとして私自身がひきうけることを決意し、その社会のなかで自発的に活動するにせよ、または、与えられた言語であるにも拘らず、その言語が私自身の言語であることをすこしも疑わず、これを自在に使いこなすように、与えられた社会のなかで、その社会と自分自身との裂目を意識することなく、自在に活動する場合にせよ、いずれの場合でも人間は所与的な側面をもつ社会のなかで自発的に活動する。人間の自発的な活動によって社会(歴史)は社会として、はじめて、存在しうる。したがって、この側面からみると、④ ⑤ ⑥ のおのおのは各個人の自発的な活動によって成立する。と同時にまた、これら三者を結びつけ一の媒介式として成立せしめるものも、また各個人の自発的な活動に他ならない。したがって、この媒介式において成立する質料変換はこの各個人の自発的な活動を通じて成立する。自発的に消費することによって人間と自然との間の質料変換を成立せしめ、自己自身を再生産する。自発的に生産することによって、人間の自然との質料変換を彼自身の行為によって媒介し、規制し、統制する。彼自身の自然力を働きかけの対象に転化せしめ対象を変化せしめると同時に彼自身の自然をこのことを通じて変化させる。また、自発的に交換することによって相互にその生産物の質料を変換するとともに、一定の有用的な形態で支出された労働力を変換する。

しかし、すでに指摘したように、この自発性は一定の基盤においてのみ発揮される自発性である。自発的な活動も一定の形をもっている。この形はその人間が如何なる社会に、如何なる形で属すか、ということによって規定される。人間の自発的な活動は、社会の側から一定の形で限定される。人間はこの限定のなかでその自発性を発揮しうる。したがって、ここでは、本来的には、人間の活動に一定の形を与える社会を問題にすべきである。所謂、自由の問題も、媒介式に一定の内容を与え、人間の自発性に一定の形を与える、社会の問題を抜きにしては在り得ない。ここで、我々

はじめに掲げた一つの前提、我々の社会存在論がそこからはじまっている一の前提を想起すべきである。つまり社会存在論が成立するためには、その社会は一定の構造をもつ一の自立的存在でなければならない、というあの前提である。媒介式を一の媒介式として成立せしめる人間の自発的な活動も、その人間が属するその社会の側からの一定の限定があつて、はじめて可能になる。はじめの前提が承認せられる限り、このことが一の要請としてここでまた承認されなければならない。問題はこうして再び社会へ還っていく。

すでに触れたように、問題になる社会は人間と人間との関係の総体である。しかし、この人間は自然との関係を離れたらまた人間であることはできない。したがって、人間と人間との関係の総体というとき、そこで問題にされる人間は自然と関係している人間であり、総体はそのような意味での人間相互の関係の総体でなければならない。人間と同時に、その人間が関係している自然がそのなかには含まれることになる。

### (三)

生産における人間と自然との関係は、人間の自然に対する関係と自然が人間に対する関係との二つの側面をもつ。前者は人間が自然に能動的に働きかける場合成立する人間と自然との関係である。人間は人間という形をした自然であるから、この関係は、基本的には、自然—自然の関係として成立する。これに対して、後者は自然が人間に対してとる所属関係である。働きかけの対象である自然、及び働きかける人間と対象との間に介入する媒介としての自然が『所有』の概念をもとにして人間との間にとり結ぶ自然と人間との関係である。後者は、したがって、本質的には自然に媒介された人間—人間の関係に他ならない。それは、人間と自然との関係の側面に現われた人間と人間との関係として成立する。生産においてこの二つの人間と自然との関係は、相互に対立し、相互に条件づけあっている。後者を欠いた前者はあり得ず、前者と結びつくことによってのみ後者は現実的となる。前者は後者を規定し、後者は前者を制約する。両者は相互に他を条件づけあう。しかし、両者のうちより大きな規定力をもつのは前者である。前者の形に後者は対応し、後者の形にまた前者は制約せられる面をももつのであるが、両者の相互に対応しあっている形を破るのは前者である。両者が相互に対応しあい、しかもこの対応している形が破れていく、この過程を歴史の基本的な形態と考えるなら、歴史の原動力となるものは後者ではなくて、前者である。人間が直接的に結合し一の総体を直接的に形成し、働きかけの対象及び媒介がこの総体に直接的に所属するか、または、個々の人間が交換を通じて間接的に結合し総体を形成し、対象及び媒介が個々の人間に分割されて所属するかは、前者の形に、つまり、人間がどのような形の能動的关系を自然との間にもちうるか、ということに対応する。現実的には、前者と後者との間にはずれがあり、両者は異なった形をとるのが一般である。しかし、後者はある時点までは前者を制約しうが、やがては前者に対応した形をとらざるを得なくなる。これまでの考察において、媒介式の⑥は実は④における人間関係と本質的には同一であり、前者は後者に規定されると述べたのであるが、④における人間関係は実は更に④における人間の自然に対する能動的关系に規定される。

以下の考察は、④における人間関係と⑤における人間の自然に対する関係との相互関係に主としてあてられる。その場合、前者よりも後者の方がより規定力をもつという観点から考察はすすめられる。考察の主力は後者におかれる。そしてそのような形ですすめられる考察が、我々がこれまで残した問題、人間存在の社会性の基礎づけの問題に触れることにもなる。人間は自然に関係するとともに他の人間に関係するという場合、その人間は生命体という形をした自然であることによって自然との関係を基礎づけ得た。しかし、その人間はどのようにしてまた他の人間に関係せざるを得ないのか、この問題に以下の考察は触れることにもなる。

人間の自然に対する関係と人間相互の関係とが互いに条件づけあうものであることは、すでに指摘したが、ここにマルクスの次の言葉を掲げておく。この言葉が考察の緒になる。『自然がまだ殆ど歴史的に変更されていないというそのことのために、自然に対する人間の限られた関係が彼等相互の間の限られた関係を制約し、そして、彼等相互の間の限られた関係が自然に対する彼等の限られた関係を制約する』(D. S. 27) 労働の主体である人間が直接的であり自然に近ければ、労働の対象も直接的であり自然に近く、そこに成立する人間の自然に対する関係は直接的であり自然に近い。そして、人間と自然との関係がそのようなものであるということは、それに対応する人間と人間との関係が直接的、自然的関係である、ということでもある。しかし、直接的または自然的という言葉はなにを意味しているか。

人間の自然に対する関係は、基本的には、自然—自然、若しくは、自然—自然—自然の運動として示すことができる。いま、自然を  $n$  で示し、上記の関係をそれぞれ次のように示すことにする。 $n-n'$ 。  $n-n''-n'$ 。両者はともに人間が自然に働きかけこれを変形する、その人間と自然との関係を示すが、前者においては、人間は身体によって直接自然に働きかけるのに対して、後者においては、人間は自分自身が自然として参加する  $n-n'$  の関係式に、媒介項を介入せしめることによって、新たな形を与える。前者が人間の自然に対する直接的な働きかけを示したのに対して、後者は人間の間接的な働きかけを示す。前者における人間と自然との関係はより直接的であり、後者におけるそれはより間接的になる。しかし、前者に対してより間接的な後者において、その間接的な関係のなかで、更に、より直接的な関係、より間接的な関係の区別が生ずる。同じことは直接的な関係である前者の内部においてもおこる。人間と自然との関係において、両者の関係がより直接的であるとか、より間接的であるとかいうのは、両者が構成する自然—自然若しくは自然—自然—自然の運動に意識がどのような形で参加しているか、ということによって分かれる。これらの運動において意識がどれだけ媒介の役割を果たしているか、ということによって決まる。或いは、基本的には自然である人間が、どれだけ人間としての自然になりこの運動に参加しているか、ということによって分けると云ってもよい。勿論、意識が参加すると云っても、意識は対象的存在の形をとらなかつたなら、自然相互の関係である上記の運動に参加できない。 $n-n'$  の場合、それは  $n$  の運動が同時にまた行為であることによって可能になる。 $n-n''-n'$  の場合はこのことのほかに更に  $n''$  が加わる。 $n''$  は一の合目的な構造をもつものとして意図的に産出されたものであり、したがって、

原理的には  $n-n'$  に媒介されたものであり、対象化された意識の側面をもつ。人間の自然に対する関係が上述の意味でより間接的になるにしたがって、人間と人間との関係もより間接的になる。この場合、人間と人間とは自然的な諸紐帯によって直接的に総体を形成していたのが、交換を媒介にして間接的に総体を形成するようになる。

$n-n'$ 、 $n-n''-n'$  の運動は、基本的には、力学的な運動として把握しうる。人間は一の自然力として自然質料そのものである対象に働きかける。彼は彼の身体に属する自然力たる腕や脚や頭や手を運動させ、この運動によって対象である自然に働きかけ、これを変形する。(K. S. 185) 対象も媒介項も一の自然として一定の力学的な規定に条件づけられて存在する<sup>o(III)</sup>したがって、この視点からすれば、この運動は自然相互の間に成立する一連の力学的な運動として成立する。 $n-n'$  で云えば、 $n$  の力が直接  $n'$  に加わり、 $n'$  自身の力との関係において決定された結果が  $n'$  自身に現われる。 $n-n''-n'$  で云えば、 $n''$  は運動がそれから始まるころの  $n$  自身の力と自己自身の力との関係によって規定され、この結果がまた一の力となって  $n'$  に働きかけ、これを変形する。

勿論、 $n-n'$ 、 $n-n''-n'$  の関係を力学的関係としてしまうことには、まだ、問題が残る。 $n''$  を例にとっても、それは力学的以外の物理学的、化学的諸属性を利用する。(K. S. 187)  $n''$  に媒介された  $n'$  への働きかけにおいては力学的以外の物理学的、化学的諸属性も重要な位置をしめる、と考えられる。しかし、人間が自然に働きかけ対象の形態を変化せしめる場合、力によって対象を結合、分離せしめることは最も素朴ではあるが、また、最も基本的な事柄であると云わなければならない。 $n-n'$ 、 $n-n''-n'$  の関係を力学的な側面から把えることは、人間の自然に対する関係を最も基本的な形で把えることであると考えられる。

$n-n'$ 、 $n-n''-n'$  のうち、対象に対する作用度は後者の方が高い。作用度が高ければ人間はより多くの使用価値を獲得できる。より多くの使用価値は自己及び他者の再生産をより多く可能にする。そして、自己及び他者の再生産がより多く可能になれば、作用度は更にまたより高くなる。量的に多くの使用価値が生産されるだけでなく、質的にも多様な使用価値が生産される。そして、分業の成立が可能になる。生産の目的は使用価値から価値へ移る。よりすくない時間でより多くの使用価値を生産するために、同一量の使用価値を社会的に必要な労働時間以下で生産するために、ここでも、より高い作用度が要求される。

$n-n''-n'$  が  $n-n'$  の形に較べてより高い作用度を示しうるのは、云うまでもなく、 $n''$  が介入するからである。対象に対する作用度は  $n$  と  $n''$  が統一され一の運動形態においてあるときのみ現実的であるが、両者のうち対象に対してより強い規定力をもつのは後者である。 $n-n''-n'$  において、運動は  $n$  からはじまる。しかし、 $n$  は極めて限られた条件においてのみ存在できる自然にすぎない。それは物理的刺戟にも化学的刺戟にも極めて限られた範囲でしか耐えることができない。それが対象に加える力も極めて限られている。勿論  $n$  は人間という形をした自然であり、単なる自然である  $n'$ 、 $n''$  とは違って対象である自然に働きかけ、これを変形しうる。変形できるだけでなく、この働きかけの形を自らつくり出すことができる。しかし、そのような場合、人間はすでに



間接的な形で自然に働きかけている。直接的な形で存在する人間は、自然としての人間として、一定の限られた条件のもとでのみ存在することができる限られた存在でしかない。人間が  $n'$  または  $n''$  に対する在り方も、直接的にはこのような限られた存在としてしかない。人間の対象への働きかけの形は、直接的には、限られている。つまり、人間が直接的な形で存在する限り、対象の形態変化はごく限られた範囲でしかおこらない。したがって、対象である  $n'$  におこる形態変化は  $n$  によるよりも  $n''$  によってより多くおこる。(この変化を  $n'$  によって説明することはできない。なぜなら、 $n'$  はこの場合むしろ結果の側にあり、したがって、結果から結果を説明することになるから。)

以上の考察が正しいならば、人間の自然に対する働きかけの形を決定する最も重要な要素は  $n''$  である。 $n''$  が新たに産出されれば  $n-n''-n'$  は新たな形で産出される。人間は新たな形で自然に働きかけうる。そして、そのことは、人間が直接的な形で自然と関係するのではなく、 $n''$  を媒介にしてより間接的に自然と関係するということでもある。直接的には限られた形でしか存在できない人間が、 $n''$  を媒介とすることによって、この限られた形から自己を解放する。

すでに指摘したように、人間は対象の形態を変化せしめる場合、そのおこされる変化がどのようなものであるかに応じて、一定量の力を一定の形態で支出しこれを対象に加えなければならない。このことは  $n''$  が介入しても全く変らない。しかし、 $n'$  へ加わる力がどのような性質のものでどのような形のものであるかということは、 $n''$  の構造が異なるにつれて変化する。 $n-n'$  においては、人間は自ら出した力を自ら伝え、配分し、これを適当な形態で対象に加えたのであるが、 $n''$  は特定の構造をとることによって人間が自らのうちで本源的に統一していたこれらの機能を分化する。分化の程度は  $n''$  が如何なる構造のものであるかによって分かれる。それは、 $n''$  が身体に密着し身体と同一の方向へ運動することによつて対象へ力を加える、という場合もあれば、 $n''$  が二つに分かれ、対象へ加わる力が身体の運動とは逆な方向へ、しかも身体が与えた力よりもより大きい力となって働く場合もある。前者は、例えば、棒で大地に穴をあける場合であり、後者は挺子で、例えば、石を動かす場合である。これらの場合、力を出すものは人間であり、これを伝え、配分するものは身体の部分と  $n''$  の双方であるが、対象に直接力を加えるのは  $n''$  である。しかし  $n''$  の構造が更に分化し、間接的な形をとると、人間が出していた力をも  $n''$  が出すようになる。したがって、この場合は、力を出す部分、これを伝え配分する部分、対象に力を加える部分、これら三部分に  $n''$  が分化する。第二の  $n''$  は第一の  $n''$  と第三の  $n''$  とを媒介し、第一の  $n''$  からの運動を規制し、ときには運動の形態を、例えば、垂直運動から円形運動に転化させる。(Vgl. K. S. 390) 人間において本源的に統一されていた三機能が三つの  $n''$  によって分担される。これら三者は、それぞれ相互に他者に対立し、相互に他者を条件づけあう。そして、このことを通じて三者は全体として一の統一体を形成し、一の  $n''$  として対象に働きかける。 $n-n''-n'$  がすでに  $n''$  によって媒介される一の関係式であったのに、その媒介となる  $n''$  自身が更に自己の内部で分化し、第二の  $n''$  によって媒介される一の関係式を構成する。構成することによって  $n$  と  $n'$  とを媒介する。 $n''$  の構造が単純でそれが単一体の形で媒介の役割を果していた場合と異なり、ここでは、 $n$  と  $n'$  とは

より間接的な形で結びつく。そして、このことによって、 $n-n''-n'$ における作用度はより高度になる。しかし、 $n''$ が三部分に分化した場合でも、三者によって構成される統一体が不完全な場合は、換言すれば、三者が相互に条件づけあうことによって成立する三者の関係が恒常的でなく、したがって、対象に加わる力が合目的な形態と量とを恒常的に維持することが困難な場合は、人間が $n''$ 自身に働きかけ三者の運動を規制し、三者の相互関係を合目的な形に統一する。(例、畜力を動力として犁を使用する場合)この場合は、 $n''$ は $n$ にまだ依存する面を多く残す。したがって、 $n-n''-n'$ の関係式が $n$ にまだより多く依存する。 $n''$ は充分な形では自立性を獲得していない。三者の関係が恒常的となり、 $n''$ が一の統一体としてつねに合目的な形で対象へ働きかけうるのは機械の出現によってはじめて可能になる。相互に条件づけあうことによって三者が構成する統一体は一の $n''$ として、 $n$ に対しても自立的存在となる。 $n''$ は人間によって産出されたものであり、したがって、 $n-n''-n'$ が如何なる性質のものであり、如何なる結果をもたらすかを人間はあらかじめ知っているのであるが、 $n''$ が現実的に媒介の役割を果す $n-n''-n'$ の過程においては、人間は自らが作った $n''$ に逆に規制される。勿論、この過程が $n-n''-n'$ の形をとる以上、人間が $n''$ へ働きかけることによって運動は開始されるのであるが、開始された運動は $n''$ の構造にしたがってなされ人間から自立する。そして、そのことによって $n-n''-n'$ における作用度はより以上に高度のものとなる。人間が一定量の力を特殊な形態で支出することには変りないが、この場合は、一般に、支出する力は極めて微量となり、しかも、支出する形態は極めて単純化される。

$n''$ における三者の区別が明確であればあるほど三者はますます鋭く対立し、三者の対立が鋭ければ鋭いほど三者は固く結合し、 $n''$ は一の統一体としていよいよ自立性を確立する。そして、 $n''$ がこのような構造をもつとき、 $n''$ を媒介者とする $n-n''-n'$ の全体は、そして、この全体は $n-(n''_1-n''_2-n''_3)-n'$ として示しうるのであるが、 $n$ 、 $n''$ 、 $n'$ の三者が不可分に結合したものとてますます統一性を確立する。 $n$ は $n''$ の構造が要求するままに運動し、 $n'$ は $n-n''$ が表示する目的に一致するものが選ばれる。三者が構成する関係式の全体がより多く合目的な性格を示し、作用度はますます高度になる。しかし、関係式がより多く合目的な性格を示すということは、同時に、その機能がより多く単一化され、固定化されるということである。人間の自然に対する働きかけの形が単一化、固定化される、ということである。したがって、人間が抱く多様な目的を実現するためには、ますます多くの $n''$ をつくり出さなければならず、それにつれて $n$ 及び $n'$ の側にもいよいよ多様性が要求されることになる。同一の目的をより高い作用度のもつて実現するために、より合目的な、より間接的な働きかけの形が要求されるだけでなく、異なった多くの目的を実現するためにもより多くの形が必要になる。人間の自然に対する関係が、謂わば、縦にひろがるだけでなく横にひろがることになる。人間は、それぞれの形にしたがって、それぞれ単一的に自然に働きかける。多くの人間が人間と自然との間にそれぞれ相異なる種類の運動を成立せしめる。人間と自然との間の相異なる過程が幾つかの主体によって荷われる、所謂、分業の成立がかくして原理的に可能となる。分業が現実的に成立するためには、或る人間が同一種類の形で自然に働きかけるだ

けでなく、同時にまた他の諸個人がそれぞれ同一種類の形で自然に働きかけていることが必要である。そして、その結果相異なる形で生産される諸使用価値の総体がこれら諸個人の再生産を充分可能ならしめるだけのものでなければならない。質的側面においても量的側面においても諸使用価値の総体はこの条件を満たしていなければならない。そしてまた、諸個人がそれぞれ従事するある一の形についていえば、各個人はこの一の形で生産したものによって自己の再生産を可能ならしめなければならない。つまり、自己の生産物が自己の再生産に必要な他者の生産物との交換を成立せしめうるだけのものでなければならない。分業が成立するためには、かくして、上述の理由から、高度の作用度が前提されることになる。以上において、人間の自然への働きかけの形の合目的化、単一化そして各種類の形の成立→高度の作用度→分業の成立の線が成り立つ。この路線を可能ならしめるものは、勿論、 $n-n'$ ではなく、また、 $n-n''-n'$ のすべてでもない。 $n''$ がある段階に達した $n-n''-n'$ のある形においてそれは可能になる。そして、分業の成立は交換の成立に連なり、それらは同時にまた私有の成立へ連なっていく。人間の自然に対する関係が間接的な形をとる或る段階において、これに対応するものとして、原理的には、すくなくとも以上のことが可能になる。

$n''$ 及び $n'$ が個人に属するかまたはこれら諸個人が形成する総体に属するかということ、そして、また、人間と人間との関係が直接的に総体の形をとるか、または、独立した諸個人が間接的に総体を形成するかということ、これらのことも同じように人間の自然に対する働きかけの形に規定される。しかし、ここでは、この問題を考察するに先だちあらかじめ次のことを指摘しておく。人間が個人としてであれ一の総体としてであれ、自然に働きかける場合、働きかけの結果は、すくなくとも、個人もしくは総体の再生産を可能ならしめるだけのものでなければならぬということ。質的側面においても量的側面においてもこのことが要求されるということ。つまり、自然に対する作用度がつねにある水準以上であることが要求されるということである。人間が自然と関係することによって自己を再生産しつづけるための、これは一の大きな前提となる。次に指摘しておかなければならないことは、人間によって要求されるこの作用度はつねに流動的であり、つねにより高度のものが要求されるということである。作用度が低度の段階においては辛うじて自己を再生産するだけの作用度がまず要求され、やがてより容易に自己を再生産する段階に至れば、自己（個体）の再生産だけでなく他者（世代）の再生産がなされ自己及び他者の再生産のためにより高度の作用度が要求される。また、一転して、分業が成立した段階においても、前述のようにこの段階自体が高度の作業度を前提にして成立するのであるが、自己の生産物を社会的に必要な時間よりすくない時間で生産するために、そして、そのことによって競争にうちかちより多くの価値を手に入れるため、より高度の作用度が要求される。人間の自然に対する関係が直接的な段階においても、また、それが間接的な段階においても、低度の作用度の段階においても高度の作用度の段階においても、それぞれそれなりの理由によって、より高度の作用度が要求される。生産の目的が使用価値におかれる場合も、生産の目的が価値におかれる場合も、それぞれ理由は異なるにせよ、より高度の作用度が要求される。この点にかけては、両者は全く同じである。そして、これは単に人間が任意にそのときどきに

抱く希望ではなくして必然でもある。それぞれの段階はそれぞれより高度の作用度を必然的に要求する。

作用度は対象  $n'$  に対する  $n$  の働きかけの度合を示す。または、 $n'$  に対する  $n$  と  $n''$  との働きかけの度合を示す。したがって、それは、 $n$  若しくは  $n, n''$  を要素として成り立つ。そして、すでに考察したように、 $n$  のみを要素とするよりも  $n$  及び  $n''$  の両者を要素とする方が作用度はより高くなる。更に、後者においては、 $n$  よりも  $n''$  を主力とするときに作用度はより高くなる。したがって、以上のことから、この作用度を  $n$  を主力とする形のものとして  $n''$  を主力とする形のものに分けることができる。勿論、 $n$  及び  $n''$  を要素とする場合、両者は統一された形においてのみ  $n'$  に対する作用度を示しうるのであるが、その場合でも、その作用度が  $n$  を主力とすることによって成立しているか  $n''$  を主力として成立しているかは原理的に区別できる。 $n-n'$  の形は云うまでもないことであるが、 $n-n''-n'$  の形においても、 $n''$  が極めて簡単な構造をとる場合は、 $n$  を主力とすることによって作用度は一定の度合を示しうる。そして、 $n$  を主力とする場合よりも  $n''$  を主力とする場合の方が作用度はより高くなる。 $n$  を主力とする最も典型的な形は  $n-n'$  であり、 $n''$  を主力とする形は、我々の考察した範囲では、 $n-(n''_1-n''_2-n''_3)-n'$  であるが、勿論この間にはいくつかの段階が成立しうる。したがって、現実においては  $n$  を主力とするものと  $n''$  を主力とするものとの中間的な諸形態がいくつか成立する。しかし、ここでは上記の二つの形だけを原理的に区別し、以下の考察に役立てる。

④  $n$  を主力とする場合、より以上の作用度を獲得するためには、そしてそのことは、 $n-n'$  もしくは  $n-n''-n'$  のある形において示される  $n'$  よりもより以上の  $n'$  に働きかけることを意味するのであるが、その主力となる  $n$  を結集しなければならない。つまり、低度の作用度しかもち得ないこの段階においては、より以上の自然に働きかけより以上の結果を得るためには、働きかけの主力をなす各個人は結集して一の統一体を形成し、統一体として対象である自然に働きかけなければならない。このことを最もよく示すものは  $n-n'$  の形であるが、 $n$  は結集することによってはじめてより以上の自然  $N'$  を対象とすることができる。式で示せば  $(n, n, n, \dots)-N'$  がここにはじめて成立する。 $n$  と  $n'$  の間に  $n''$  が介入しても全く同じである。これらの場合、一方には  $n$  或いは  $n-n''$  の個々が一に結集した総体があり、他方にはこの総体が自らの対象としているところの  $n'$  の総体  $N'$  がある。そして、これは、観点を変えれば、一方の側には  $n$  の総体があり、一方の側には  $n''$  と  $n'$  との総体があるということでもある。 $n$  が直接的に一の総体を形成するように、 $n''$  及び  $n'$  を併せた一の総体が直接的に形成される。 $n$  が直接的に総体を形成しより以上の作用度を獲得するように、 $n''$  及び  $n'$  が直接的に総体を形成し直接的に総体に所属することによってより以上の作用度が獲得される。 $n$  が主力となるこの段階においては、人間はより以上の作用度を獲得するためには、必然的に他の人間と関係しなければならない。ここでは、直接的に形成された人間関係の総体を通して諸個人ははじめて自然に関係することができる。そして、人間関係がこのような形で総体を形成する限り、 $n''$  及び  $n'$  はこの総体に直接所属する。

この場合、総体の大きさと作用度との間には対応関係が成立する。ここでも、働きの結果はすくなくとも総体の再生産を可能ならしめるだけのものでなければならぬ、という前に掲げた前提が生きてくるのであるが、作用度が高くなればより大きい総体の再生産が可能であり、したがって、より大きい総体の形成が可能になる。作用度が低くなればより小さい総体に縮小せざるを得なくなり、更にもっと低くなれば総体を維持することは不可能となり、総体は分解する。そして、大きい総体は作用度がより高くなるにしたがってより大きい総体に発展していくが、この総体はある段階に至ると分裂し二つ以上の総体になる可能性をももつ。作用度が更に更に高くなると、今度は逆に、直接的な総体は分解して諸個人は独立するようになる。そして、諸個人は独立することによって、間接的に総体を形成する。つまり、作用度が著しく高くても低くても直接的に形成された総体は分解する。しかし、前者においてそのような結果が得られたということは、すでに、作用度が  $n$  を主力とするものから  $n''$  を主力とするものに移ったことを示す。人間の自然に対する働きかけの形が別のものになったことを表わす。

$n''$  を主力とする場合、すでに述べたように、作用度の高度化は  $n''$  の機能を分化、固定化せしめることによって成立する。 $n-n''$  は個々に分解し、独立な  $n-n''$  として自立し、それぞれの  $n-n''$  がそれぞれの対象  $n'$  をもつことになる。直接的に総体を形成した人間関係は独立した諸個人により間接的に形成される。これは  $n''$  の構造と機能から生れた必然の結果である。作用度を高度化する以上、諸個人は好むと好まざるとにかかわらず、個々の独立した個人として自然に働きかけざるを得ない。 $n$  の総体、もしくは  $n, n''$  の総体、 $n'$  の総体もしくは  $n'', n'$  の総体、これらのすべてが、それぞれ個々のものに分解する。前の段階では  $n$  の総体  $N$  に対して  $n'', n'$  の総体  $N'', N'$  があり、前者に後者は直接所属したが、ここでは、個々の  $n$  に個々の  $n'', n'$  が所属することになる。勿論、総体が分解し個別化するまでには過程があり、したがって、その過程では各種の中間的諸形態が成立するのであるが、 $n$  を主力とする段階から  $n''$  を主力とする段階へ移る以上、前者は必ず後者へ移る。移ることによって  $n''$  を主力とする作用度も真に現実的になる。

$n'', n'$  が個々の  $n$  へ所属するという事は働きかけの結果がまた個々の  $n$  へ所属することを意味する。この結果は、ここで分業が成立している以上、他人にとって有用なものでなければならず、質料的に相互に異なるものでなければならない。そして、またこの結果は相互に異なる作用度で生産される。なぜなら、それが  $n''$  を主力とする段階で生産されたものである限りにおいてはそれらはすべて同一であるが、この同一の段階においても種々の高さの作用度が成立するからである。それぞれの諸個人がそれぞれ異なる作用度で働きかけることが、むしろこの段階における生産の本質的特徴になるからである。個々の個人が異なった使用価値を異なった作用度で生産する、このことは、各個人へ異なった比率で分配が行われることの根拠になる。個人間のこの差別は、それが徹底すると、所有する者と所有しない者との区別を生ぜしめる。所有する者としいないものとの区別が、このことによって、原理的に可能になる。 $n$  を主力とする段階では、人間関係の総体は各個人に対して基体の意味をもち、生産の目的は基体の再生産におかれた。しかし、基体が再生産され

るためには諸個人の再生産が不可決になる。各個人の再生産を確保するために、生産物は、原則的には、平等に分配された。 $n''$  を主力とする段階ではこの平等な分配は不平等な分配に代る。

すでに触れたように、 $n-(n''_1-n''_2-n''_3)-n'$  を典型とする  $n''$  を主力とする段階では作用度の高度化は  $n''$  の機能を分化、固定化することによって得られた。人間の自然に対する働きかけの形はその度に分化、単一化、固定化し、生産物もその度にますます分化、単一化する。このことは、しかし、人間がますます他の人間の生産物に依存せざるをえないことを示す。換言すれば、諸個人がそれぞれ高度化された作用度で自然に働きかけることは、諸個人がますます強く相互に結びつかなければならぬということである。分化、単一化の度合が高ければ高いほど分化、単一化した人間はいよいよ強く相互に結合しなければならない。結合しなければ、諸個人は自己を再生産しえない。 $n$  を主力とする段階では作用度を高度化するために諸個人は結合しなければならなかったが、この段階では、逆に作用度が高度化された結果、諸個人は結合せざるを得なくなる。その結合の仕方は、前者においては直接的であり後者においては間接的であり、互に異なるが、それが諸個人の再生産の条件である点においては全く同じである。一方に諸個人の総体があり、他方に、この総体に対するものとしての自然がある、という点にかけても、両者は全く同じである。そして、そのことは、 $n$  を主力とする段階でも  $n''$  を主力とする段階でも、人間の自然に対する作用度は、 $n$  もしくは  $n-n''$  で結集され一の総体を形成することによって、したがって、この総体に対するものとしての総体としての自然を対象とすることによって、はじめて現実的でありうることを示す。人間は自然を離れては人間として存在し得ないが、その自然に対する関係は人間相互の関係を通して、はじめて、現実的なものになりうることをこのことは示している。

人間は自然的存在であると同時に社会的存在である。感性的対象的存在である自然と人間との関係は、人間自身が感性的対象的存在であることによって可能であった。しかし、人間はその自然に対して自ら働きかけるところの自然であった。基本的には自然と自然との関係として成立する人間と自然との関係の形を、人間は自ら意図的に作り出すことができた。自然と自然との関係が人間と自然との場合は特殊な形のものになった。この特殊性は人間が自然を一般者とする特殊者であることに由来した。

しかしまた、この人間の自然に対する関係は人間と人間との関係を離れてはあり得なかった。人間の自然に対する働きかけは社会のなかで成立し、社会のなかでのみ意義をもち、作用度はそのような形をとることによってのみ現実的になった。したがって、この側面からすれば、他の人間と関係することによってのみ自然との関係を成立せしめうる人間は、自然的存在であるよりもまず社会的存在でなければならぬことになる。人間は社会的存在であることを基本とし、自然的存在であることはその上に成立することのように見える。

しかしまた、このことは次のようにも考えられはしないか。人間が人間関係を通して自然と関係するということは、人間が特殊な自然であることによって成立する、人間と自然との関係の特殊な

形ではないだろうか。人間は特殊な自然であることによって自然に働きかけ得たのであるが、その働きかけが人間関係を通してなされる特殊なものであるということになりはしないか。自然的存在である人間は自然を離れては存在しえないのであるが、その人間が社会を離れてはありえないということは、人間が社会を通してのみ自然に働きかけうる特殊な自然であることを示しはしないか。したがって、この考察が正しいなら、社会的存在であることによって自然に関係するのではなく、特殊な自然であることによって他の人間に関係し、この人間関係を通して自然に関係することになる。この限りにおいて人間関係は自然との関係を可能にする。人間は、社会的存在であることを基本とする存在ではなく、逆に、自然的存在であることを基本とする存在であることになる。社会的存在であることはこの上に成り立つ。つまり、人間が特殊な自然であることによって社会的存在の側面がでてくる。社会的存在の側面は人間が特殊な自然的存在でありうるための一の条件に、しかし、不可欠の条件になる。このことが承認されることによって、人間と人間との関係の仕方は、基本的には、人間の自然に対する働きかけの形に規定される、という小論の考察もそこではじめて承認されることになる。

おわりに ——。

人間の自然に対する関係と人間と人間との関係とは相互に規定しあう。前者が後者を規定する面もあれば後者が前者を規定する面もある。しかし、すでに断ったように、前者が後者に対する規定力の方が支配的である。小論はこの観点にたち、前者が後者を規定する面だけを主として考察した。しかし、後者が前者を規定する面を併せえたとき、考察は更により具体的に展開する筈である。この考察は、たとえそれがマルクスの立場に限定されたものであるにしても、その意味においてまだ充分でない。小論に欠けているこの面を補い、とりのこした問題、社会認識の問題を更に追究するとき、社会存在論はもっと具体的な形で成立する筈である。

これらは、しかし、すべて今後の課題に残したい。

#### 註

(註1) 以下の考察は田辺振太郎氏の次の著書に負うところが多い。

技術論, 1960年, 青木書店。

引用書名略符号

K. \_\_\_\_\_ K. Marx. Das Kapital, Dietz.

D. \_\_\_\_\_ Marx.-Engels, Die deutsche Ideologie. Dietz.

P. \_\_\_\_\_ K. Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie. Dietz.

F. \_\_\_\_\_ K. Marx. Formen, die der kapitalistischen Produktion vorhergehen. Dietz.

Ph. \_\_\_\_\_ G. W. F. Hegel. Phänomenologie des Geistes. hers, J. Schulze, 1841, Berlin